

ばんけい

教育ほつとにゅーす
かわら版こ みち
教育の小径 No.130
2019 August
8月号

(一財)総合初等教育研究所参与

北 俊夫先生



今月のことば

ばしとうふう
馬耳東風

春の心地よい風(東風)が吹いてきても、馬は何も感じないことから、他人の意見や批判などに耳を傾けず、聞き流す態度をいいます。

地域行事への参加促進を

- 子どもたちに地域の行事や活動への参加を促すことによって、地域社会の一員としての自覚や地域に対する誇りを養うことができます。
- 子どもたちに地域行事への参加を促すには、まず教師自身が地域の人たちが取り組んでいるさまざまな活動を理解する必要があります。

地域の担い手を育てる

夏休みの期間には、地域で祭りやイベントなどさまざまな行事が行われます。公園などでラジオ体操会を行っている地域もあります。地域には、昔から続いている伝統的な行事もあれば、新しく始まったものもあります。近年では地域の活性化と結びつけて行われているものもあります。

地域で行事を企画している人から、「最近、行事を計画しても、子どもたちの参加がめっきり少なくなった」という話を聞いたことがあります。「背景には、子どもが少なくなったことや地域との関わりが希薄になったことがあるのではないか」とも言っていました。せっかく時間をかけて準備し実施しても、参加者が少ないと企画した者としてもがっかりします。

子どもたちに地域行事への参加を促すことには、人数を増やして行事を賑やかにするというだけでなく、次のような重要な意義があります。

まず、自分たちの住んでいる地域にはどのような人たちが生活しているのか。どのような行事が根づいているのか。また、行事の実施にどのような課題があるのかなどについて知る貴重な機会になります。地域に対する理解を深め

ることができます。

また、祭りなど伝統的な行事を受け継ぎ、発展させようとする意識を育てることができます。行事を観察するだけでなく、参加・協力することでよりよい社会の形成に主体的に関わろうとする意識と態度が醸成されます。

その結果、子どもたちに地域社会の一員としての自覚や、地域社会に対する誇りや愛情を育むことができます。子どもたちに地域のさまざまな行事への参加を促すことは、いまの地域を元気づけるだけではありません。地域の行事参加は地域での絆づくりです。将来の地域の担い手を育てることにつながっています。

求められる教師の地域理解

学校で子どもたちに地域行事への参加を促すには、教師が地域のどこで、いつ、どのような行事が行われているのかを把握しておかなければなりません。また、それは子どもたちの参加が可能なのか。子どもたちにとって価値があるのかを判断することも求められます。行事の内容によっては、直接参加することができず、周囲から観察するだけの場合もあるからです。

夏休みの期間を利用して、教師が地域の行事を実際に観察してどのように

行われているのかを知ること大切です。実施の時期でない場合には、ビデオなどを視聴させていただくと、活動の様子を知ることができます。

地域のさまざまな行事について情報を収集し、子どもたちに伝えます。地域の行事マップや行事ごよみを作成して校舎内に掲示し、情報の提供を行うことによって、子どもたちの参加意識を高めることができます。お囃子や神楽、子ども歌舞伎など伝統芸能の継承に関わっている子どもに、写真やビデオなどを活用して取り組みの様子を紹介させることも考えられます。

参加した子どもには、地域行事の様様を後日聞き、参加の意義を伝えるとともに、今後も継続して関心をもつよう励ますなど積極的に評価する言葉をかけます。子どもたちにとって教師からの一言は嬉しいものです。

地域の人たちから「先生方にも地域の行事にぜひ参加してほしい」という声が聞かれます。もし可能であれば、教師も一緒に参加したいものです。子どもたちは地域での教師の姿をまた違った目で見ようようになります。

今月の 記念日
タコ(蛸)の日
(8月8日)

タコの足の数が8本であることにちなんで、広島県と三原観光協会が決めました。三原はタコ漁の盛んな地域で、この日にタコ供養を行っています。

「子どもが交通事故に」の一報

日曜日に携帯電話が鳴り、保護者から「子どもが交通事故に遭った」との知らせが入りました。学級担任としてどのように対処したらよいのでしょうか。

「交通事故に遭った」との知らせが事故直後なのか。ある程度の時間が経ち、処置が終わったあとなのかによって、対応の仕方が変わります。

いずれの場合にも、その場で保護者から聞き取りたいことは、交通事故に遭った場所とともに、けがの状態や応急措置の状況です。病院に運ばれているときには病院の名称も聞きます。緊急の場合には、この場で事故の状況や原因などは聞かず、最低限の情報収集に留めます。

事故に遭った子どもの状況を管理職に報告し、学級担任としての対応の仕方について指導を受けます。例えば、すぐに病院に駆けつける。翌日、お見舞いに伺う。電話をして、事故の原因など詳しい状況を聞くなどの対応が考えられます。

事故に遭った子どもには慰めの言葉をかけます。事故に遭った子どもは身体だけでなく、精神的にも衝撃を受けています。カウンセリングマインドの視点から、不安や悩みを取り除く助言をします。カウンセリングは保護者に対しても必要な場合があります。専門家のアドバイスを求めることも考えられます。学級の子どもたちには、当該の児童に配慮しつつ、事故の状況を知らせます。そして、交通事故には絶対に遭わないこと、交通事故を起こさないことを伝えます。

教育の動向

年間指導時間の見なおし

各教科等及び各学年の年間授業時数は、学校教育法施行規則第51条にもとづく「別表」に標準として定められています。標準とは最低の授業時数として捉えられているようです。

子どもの学力向上が課題になってから、夏休みなどの長期休業日を短縮したり、土曜日に授業を実施したりする学校が増えてきました。その結果、標準とされている授業時数を大幅に上回る学校が増加しています。

文部科学省の調査によると、小学校5年の年間授業時数は980時間ですが、昨年度1086時間を越えていた

学校の割合は25.7%でした。平成29年度の調査では9.4%でした。越えた分は週当たり3コマ増に当たります。年間206日以上を授業日数にしている小学校は27.8%でした。

文部科学省は、小学校5年の場合年間1086時間未満に留めるよう、上限を定め、学校に見なおしを求めています。これは学校の働き方改革の趣旨を踏まえたものです。従来から、別表に規定された「授業時数」に対して、指導に要する時間を「指導時間」と言い表し、両者を区別してきました。

指導の時間数や日数を増やせば学力が高まると受けとめられがちですが、教員の働き方改革との関連を視野に入れて、各教科等の年間指導時間を適切に設定することが求められます。



「思考力・判断力・表現力」の

指導と評価

その10

育て方④ 見方・考え方を働かせる

新学習指導要領の各教科等の目標には身につける「資質・能力」が3項目から示されています。その一つに「思考力、判断力、表現力」に関わる目標があります。各教科等の目標の前文では、これらの「資質・能力」を育成するため「見方・考え方」を働かせることを求めています。

各教科等の『解説』によると、「見方・考え方」に関連して、例えば社会科では、「比較・分類」「総合」「関連付け」などの活動方法が示されています。また、算数科では、「根拠を基に筋道を立てて考え、統合的・発展的に考えること」と示されています。理科では、「比較、関係付け、条件制御、多面的に考えること」と解説されています。

これらは、各教科等の学習指導において思考力、判断力、表現力を育てるためにも、「見方・考え方」を効果的に働かせることが重要であることを示唆しています。

ここで確認したいことは、「見方・考え方」を誰が働かせるのかということです。授業を主導するのは教師ですから、教師自身が「見方・考え方」を働かせながら授業の質を高めていきます。合わせて、子ども自身が「見方・考え方」を働かせながら学びを深まりのあるものにするのが大切です。

教師も子どもも「見方・考え方」を働かせるためには、まず、教師が働かせたい「見方・考え方」を教材や題材に即して具体的に明確にします。そのうえで、働かせる場面を意図的に設定し、子どもたちが意識して働かせながら学習を展開するよう助言します。

INFORMATION

好評発売中!



1~6年

児童用教材「楽しい学校生活」が特別活動をサポート

新学習指導要領に新設されたキャリア教育の内容も掲載。1年間の記録を蓄積。学習と活動のポートフォリオに。

- 新設された学級活動(3)キャリア教育に対応。
- 児童の自発的、自治的な活動をサポート。
- 学級活動や、学校行事を継続して記録。評価に活用できます。

編集後記

学校における働き方改革の推進により、長期休業期間の業務も変わりつつあります。様々な業務の見なおしや新たな業務改善の手段が求められる中で、何のための働き方改革なのかをしっかりと考えながら取り組みたいものです。(K記)

企画・編集：ぶんけい教育研究所
発行：株式会社文溪堂
発行日：2019年8月1日